

えるのが妥当と考える。

以上、杉の木遺跡の土器の分類を通して思うところを述べてきた。従来の議論では、吉ヶ谷式の祖形を求めるにあたり、ごく一部の特徴を問題としてきた観がある。もとより、土器型式はその大きさに違いはあろうが、先行する型式からの変化や他地域からの影響を受け独自のものとなったときに我々が認識できるものと考えられる。このことから一つの要素をもってその影響を考えるのは問題が残るであ

ろう。多方面からの影響があつてしかるべきである。今後、吉ヶ谷式土器の型式内容をより豊かにするためにはこのような視点に立ち、細かな分類を行いその関係を考えていく必要がある。

(宅間清公)

註

(1) 報告書では台付甕としているが、ここでは広口壺とした。

2. 毛塚古墳群の提起する問題

(1) はじめに

今回の杉の木遺跡第4次調査及び試掘調査によって、4基の古墳跡(毛塚28・32・33・34号墳)の具体的な内容が明らかとなった。今まで諏訪山古墳群や高坂古墳群の影に隠れ、正当な評価をうけていなかった毛塚古墳群について、今回の調査成果は古墳群の形成過程の把握、桜山窯跡群との需給関係の解明、埴輪棺にみられる副次的埋葬施設のあり方など、多岐にわたる問題について重要な手がかりを与えてくれた。

(2) 古墳跡出土土器について

古墳跡から出土した土器をもとに各古墳の築造年代を中心に検討する。

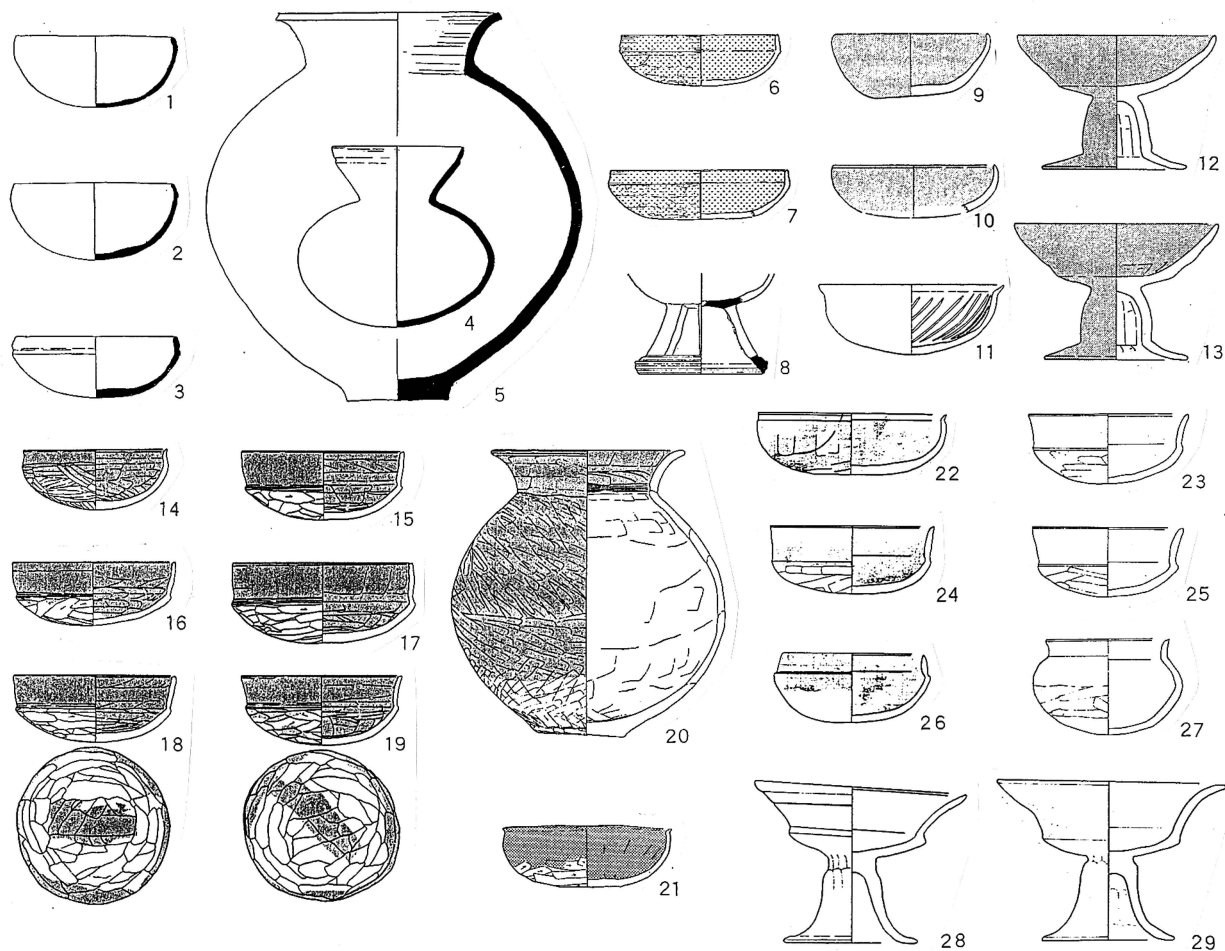
a. 編年的位置づけ

毛塚32・33号墳の2基から所謂「比企型坏」が出土している。比企型坏に関しては水口由紀子、尾形則敏の両氏によって、精度の高い相対編年が組み立てられている(水口1989、尾形1999)。ここではそれらの成果に照らしながら出土土器の編年的位置づけについて検討する。

毛塚33号墳からは、法量の異なる大小の坏が出土している(第61図1・2)。1は口径14.3cm、器高5.8cmの深身で、口唇部が長く外反し、赤彩のな

いものである。2は口径12.8cm、器高4.6cmのやや小振りのもので、口唇部が短く外反し、赤彩が施されている。このうち2は、水口編年Ⅰ段階第2・3小期、尾形編年Ⅱ期に位置づけられる。年代は、水口Ⅰ段階が5世紀末～6世紀前半に比定され、第2・3小期はその後半にあたる。また、尾形Ⅱ段階の年代は6世紀1/5で、須恵器型式のMT15併行期に比定されている。これらから毛塚33号墳の築造年代に関して、6世紀前葉を中心とする時期に捉えておきたい。

周辺では、赤彩された半球形坏と須恵器坏身模倣坏を出土した諏訪山5号墳(金井塚ほか1970)や、半球形坏と内斜口縁坏を出土した代正寺11号墳(鈴木1991)、TK23型式の須恵器高坏と須恵器坏身模倣坏を出土した下道添1号墳(坂野1987)などが、先行段階の5世紀末葉に位置づけられる。比企型坏を出土した古墳では、さいたま市白鷲宮腰4号墳(岩田1998)が最古相を示す。須恵器蓋坏を模倣した模倣坏と比企型坏が共伴しており、6世紀初頭を中心とする時期に比定される。また、帆立貝式古墳の岩鼻2号墳(宮島・江原1989)や、さいたま市側ヶ谷戸11号墳(石原2002)からも比企型坏が出土している。時期的には毛塚33号墳に後続する6世紀中葉段階であろう。



1～5 諏訪山5号墳 6～8 下道添1号墳 9～13 代正寺11号墳 14～20 白楸宮腰4号墳 21 側ヶ谷戸11号墳
22～29 岩鼻2号墳 (S=1/6)

第112図 古墳関連出土土器

次に、毛塚32号墳からは、口径14 cm台の大振り
で扁平な比企型坏が2点出土した(第45図1・2)。
ともに口径14 cm以上で、口縁部は内屈し、口唇部
が短く外反する。2点とも型式的には同じで、水口
編年Ⅲ段階第1小期、尾形編年Ⅳ期第1小期にそれ
ぞれ位置づけられる。水口Ⅲ段階の年代は6世紀末
～7世紀初頭、尾形Ⅳ段階第1小期の年代は6世紀
4/5～5/5に比定されている。これらから年代的
には6世紀後葉から末葉に位置づけることが妥当
であろう。しかし、後述するように円筒埴輪の年代
観からみた本墳の築造年代は6世紀中葉頃と考えら
れることから、両者の年代観には大きな齟齬がある。
追葬などの可能性を含め、今後微調整が必要である。

b. 土器の使用状況

古墳における土器の使用状況に目を向けると、両
者は対照的なあり方を示している。毛塚32号墳では、
周溝の底面に伏せた状態で土器を2箇所に配置して
いたのに対し、毛塚33号墳では墳丘から周溝内に
転落した状態で出土している。

このような土器の配置の差異が、葬送儀礼のどの
ような位相を反映しているのかは明らかでないが、
古式群集墳の出現以降、坏を単独あるいは複数重ね
て周溝底面に置くような斉一的な土器配置のあり方
が認められ、それまでの壺や甕などの貯蔵用途の土
器を主体とした土器供献儀礼との間に大きな断絶が
あることが指摘されている(山田2005)。今後は周

辺地域を含む古式群集墳における出土土器の類型的な把握から、より具体的な葬送儀礼を復元することが肝要であろう（註1）。

c. 湖西産須恵器と古墳の終末

古墳跡ではないが、第1号性格不明遺構から須恵器長頸瓶（第69図1）が出土した。遺構の性格については明確にし得ないものの、毛塚古墳群における古墳終末の問題を考える上で重要な鍵を握る。

長頸瓶は、器形、胎土などの特徴から静岡県湖西窯産の搬入須恵器と考えられる。後藤健一氏による湖西産須恵器の分類によれば、肩部に鋭い稜をもち、口縁端部を上下に引き延ばす特徴から長頸瓶Ae2に分類される。年代は第IV期第1小期に位置づけられ、701～715年の8世紀第1四半期前半代に比定されている（後藤1989）。ここでは本遺構の年代について、やや幅をもたせ7世紀末葉から8世紀初頭に位置づけておきたい。先に指摘した終末期古墳との関連性をうかがうことができるとすれば、古墳の終末時期を考える上で重要な指標となる。

（3）円筒埴輪について

今回の調査において、古墳跡と第1号埴輪棺、埴輪集中区から円筒埴輪が出土した。円筒埴輪の編年の位置づけについては、埼玉県内の円筒埴輪の形態的变化を基軸に4期区分した山崎武氏の円筒埴輪編年（山崎2000）と、桜山窯跡群の編年を試みた飯塚武司、江原昌俊氏（飯塚1984、江原2004）の研究成果を参照する。

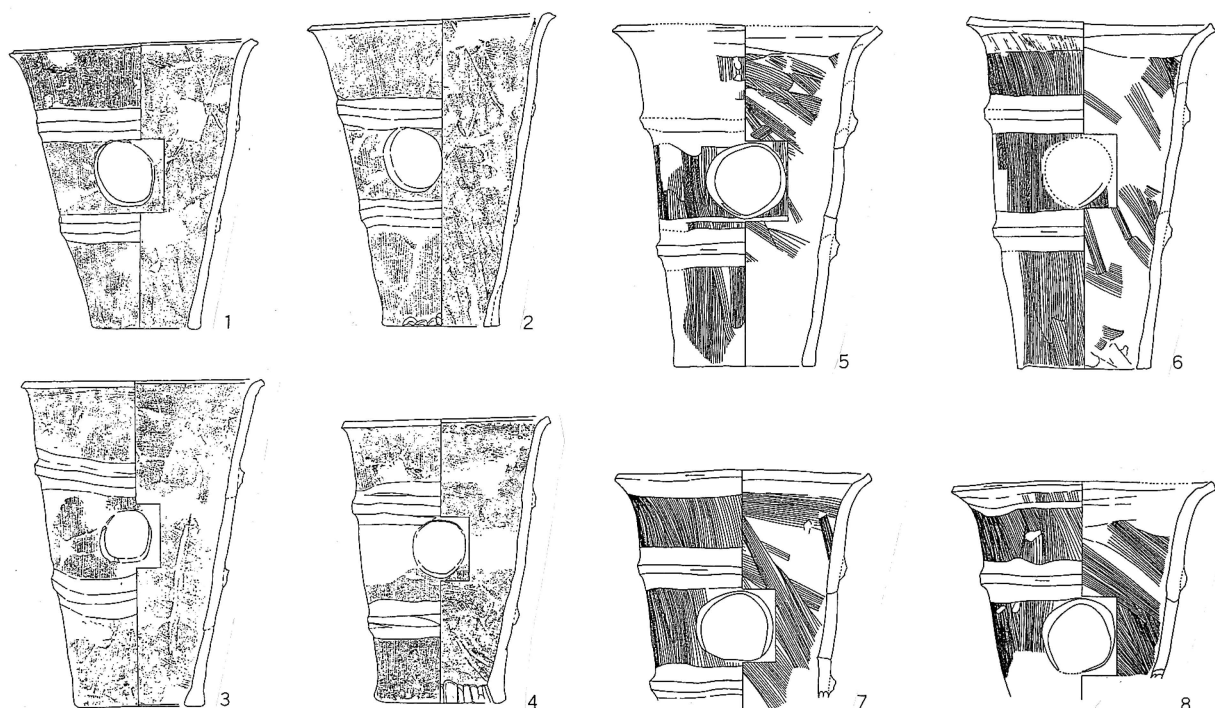
毛塚33号墳は6世紀前葉に築造された古墳で、周溝から円筒埴輪の破片がわずかに出土した。外面に赤彩を施し、断面台形の突帯をめぐらし古相を呈する。出土量が少なく、実際に埴輪が樹立されていたかどうかは判断に苦しむが、周辺に5世紀にさかのぼる古墳跡が眠っている可能性を示唆する。

毛塚28号墳は、第3次調査の際に円筒埴輪が出土したが、今回の試掘では形象埴輪のみの出土であった（宮島・江原2003）。円筒埴輪は2条突帯3段

構成に、3条突帯4段構成が客体的に含まれている。3条突帯のものは全体の器形の判明するものがないため、2条突帯の円筒埴輪を中心にとみると、各段の幅が均等に割り付けられ、口縁部が大きく開く特徴的な器形である。器高30～34cmの小型品で、突帯は低平なM字形、内面に「×」のヘウ記号がある。形態的特徴から6世紀中頃のやや古い段階に位置づけられる。

毛塚32号墳では、北西周溝からまとまった状態で円筒埴輪が出土した。円筒埴輪は2条突帯3段構成のものが主体で、一部大型円筒埴輪の破片が含まれている。2条突帯3段構成の円筒埴輪の特徴を列記すれば、（1）口縁端部内面のヨコナデによる匙面、（2）稜の明瞭な断面低台形の突帯、（3）透孔穿孔後の入念なナデ調整、（4）突帯下側にめぐる連続的な擦痕、（5）胎土中の白色針状物質の混入、などが挙げられる。これらの特徴に類似した円筒埴輪を周辺で探すと、直線距離にして約700mしか離れていない桜山窯跡群の1号～5号窯跡灰原、B群南斜面下灰原出土品の中に類例が存在することが判明した（水村1982）。特に、断続ナデ技法に類似する突帯の下側をめぐる連続的な擦痕が指標となる。今回は類例の提示にとどめ、同工品論的視点から再度分析をおこないたい。

さて、毛塚32号墳からは通有の円筒埴輪に混じって、大型円筒埴輪の破片が少量出土した（第58図84～87）。図上で器高93cmの5条突帯6段構成の円筒埴輪に復元された。この規格と同じ大型円筒埴輪が、近隣の諏訪山古墳群7号周溝から出土している（埼玉県教育委員会1983）。未報告のため詳細は不明であるが、周溝内に埋設された埴輪棺に使用されていたものである。両者を比較すると、最下段や口縁部の幅に差異が認められるため、直接的な対比は難しいが、胎土・焼成・色調などは酷似していることから、同一系譜のものであろう（註2）。なお、諏訪山古墳群7号周溝例には、円形透孔ものと方形透孔の2種類が認められ、埼玉二子山古墳出土例と



1～4 毛塚28号墳 5・6 桜山窯跡群1号～5号窯跡灰原 7・8 桜山窯跡群 B群南斜面下灰原 (S=1/8)

第113図 毛塚28号墳及び桜山窯跡群出土円筒埴輪

の共通性が指摘されている。

このように毛塚32号墳から出土した円筒埴輪の多くは、桜山窯跡群から供給されたものと推測される。器形の特徴から山崎編年Ⅱ期に比定され、6世紀前葉から中葉の年代を与えることができる。また、桜山窯跡群の編年と対比すれば、飯塚編年の桜山第Ⅱ段階、江原編年の第Ⅱ期に概ね該当する。飯塚氏は桜山第Ⅱ段階の年代を6世紀第2四半期後半～6世紀第3四半期前半に位置づけており、参考となる。ここでは毛塚28号墳に後続する6世紀中葉から後葉の年代に位置づけておきたい。

毛塚34号墳は、周溝の一部を確認しただけの部分的な調査であったが、最下段の伸長化した円筒埴輪(第63図1)が出土しており、山崎編年Ⅲ期に位置づけられる。年代的には、毛塚32号墳に後続する6世紀後葉に比定される。

第1号埴輪棺は、毛塚32号墳の周溝外縁に埋設されていた。調査の所見では、周溝がある程度埋まった段階に側壁を掘削したと考えられる。3条突帯4

段構成の円筒埴輪3個と、2条3段構成の2個を組み合わせたものである(第65図)。3条突帯のものは同工品で、一括して入手したと考えられる。第2・3段目に対向して大き目の透孔が穿孔されている。また、2条突帯のものは、毛塚28号墳例と同じ内面に縦位のへう記号があり、転用の可能性が高い。

埴輪集中区出土の円筒埴輪(第67図)は、特徴的な低平な突帯で、第1号埴輪棺と同じく毛塚28号墳から転用したものと考えられる。

このように第1号埴輪棺および埴輪集中区の円筒埴輪の一部には、毛塚28号墳に樹立されていたものが転用された蓋然性が高い。そのため、遺構自体の年代は厳密には明らかにし得ないが、毛塚32号墳の築造後、さほど時間をおかない範囲での所産と想定される。

(4) 形象埴輪について

試掘調査ながら毛塚28号墳では人物や馬などの形象埴輪が良好な状態で出土したほか、毛塚32号

墳に帰属する可能性の高い形象埴輪の破片がある。毛塚28号墳では、坊主頭の男子と島田髷の女子からなる3体以上の人物群、環状鏡板付轡の馬とf字形鏡板付轡の馬の2体が少なくとも樹立されていた。いずれも全体像の判るものはないが、墳丘径17mの円墳としては十分すぎる内容である。

坊主頭の男子は、神奈川県登山古墳出土の男子にその風貌が似ているが、先端部をつまみ出したT字形の棒状美豆良と垂髪を表現し、耳孔に接するように耳環を貼付した剥落痕がみられた。下げ美豆良の類例は桜山窯跡群でも出土している。顔の表現は鼻筋の通った三角形の鼻や目・口の形状、顎の造作などは基本的に共通しているが、眉が桜山窯跡群のように一本の粘土紐で表現せず、左右別々の粘土紐で表現されている。全体の表現は岩鼻5号墳から出土した鋸歯状冠帽を被る男子に類似している。

女子は、男子と同じ丸顔で目・口・鼻などの造作も類似していることから同一の工人（製作者）の手になるものであろう。異なる点としては、耳の表現が、耳孔の周りに貼付した円板状の粘土帯でなされている。このような耳の表現は女子に限られた表現である。やはり顔の表現は岩鼻5号墳出土の女子に類似し、同一系列の工人による作品であろう。なお、接合はしなかったが、この女子像は左手に棒状のものを握っていた。棒状のものがいったい何を表現しているのか定説はないが、通常は右手にもつ場合が多く特異な例である。

この他にも人物が捧げもつ壺などが出土しており、さまざまな役割を演じた人物から構成された埴輪群像が樹立されていたことをうかがわせる。

次に、毛塚32号墳について検討する。前述したように確実に古墳に伴うものではなく、いずれも重複遺構からの出土である（第71図）。破片資料が多く明確なものはほとんどないが、円筒埴輪と同じく胎土に白色針状物質を含む在地窯の製品である。

人物埴輪では、円環状の耳の表現や木芯中空技法による腕部の成形、粘土紐による指の表現など、い

ずれも桜山窯跡群にみられる特徴である。また馬形埴輪では粘土紐で縁金具を表現したf字形鏡板や尻繫に垂下された三鈴杏葉などの馬具表現は6世紀前半代に多くみられるものである。これらの点から円筒埴輪と同じく桜山窯跡群から供給された可能性が高いといえよう。

（5）おわりに

毛塚古墳群をめぐる二、三の問題点について述べてきた。その結果、6世紀前葉に毛塚33号墳が築造され、その西側に人物、馬などの多彩な形象埴輪群を樹立した毛塚28号墳が6世紀中葉に築造された。相前後して毛塚32号墳が築造され、桜山窯跡群から埴輪が供給されていたことが明らかとなった。そして、6世紀後葉には毛塚34号墳が築造されたものと推測される。このように6世紀前葉以降、間断なく古墳が築造された状況が復元される。周辺の高坂古墳群や諏訪山古墳群のように群中に有力な前方後円墳は築造されていないが、6世紀を中心に造墓活動が繰り返されたと想定される。

紙幅の都合で埴輪棺などの副次的埋葬施設の性格（註3）については、まったくふれることができなかった。小規模埋葬施設に葬られた被葬者の性格や中心埋葬施設の被葬者との関係性などの問題については、別稿で検討したい。また、毛塚古墳群を含む高坂台地周辺の古墳群の成立と展開について、現在、当団によって調査が進められている、低地部に立地する反町遺跡などの古墳群の様相が解明された時点をまっけて、再び検討をおこないたい。

（大谷 徹）

註

- （1）鴻巣市新屋敷古墳群では、陸橋部脇の周溝底面に土師器坏と滑石製紡錘車をセットで置いた事例が多く検出された。古墳群ごとの葬送儀礼の個性性と斉一性の検討が今後の課題である。
- （2）東松山市教育委員会の江原昌俊氏の御高配により東松山市文化財センターにて実見。
- （3）埼玉県内における副次的小規模埋葬施設について長滝歳康氏は、系譜と類例を検討し、被葬者の性格についてまとめている（長滝・中沢2005）。